

(要約版)

## 山地農耕民ハニにおけるたばこの贈与・交換についての民族誌的研究

研究助成者 阿部朋恒 ((首都大学東京大学院) 社会人類学)

### 1. 研究目的

本研究の目的は、中国雲南省とその周辺地域の山地において棚田耕作を営むハニ族を対象とした民族誌的調査を通じて、たばこの贈与・交換を含む広義の喫煙行為の社会的な意味を、村落における社会関係との関連において明らかにすることである。

ハニ族は由来複数の村落を統合する“くに”のような広域的な社会組織をもたず、代わりに親族関係や精霊信仰にまつわる役職の威信を軸とする村落内部の序列を発達させてきた。この序列は、村落における暮らしのあらゆる場面で意識されており、さまざまな対面的状況を統制している。とはいえ、それは必ずしも固定的、明示的なものではなく、場所や顔ぶれなどの要素に応じて、場面ごとに暫定的に現れるものである。ハニ族の村落生活において、たばこの贈与・交換はその場に居合わせた人々のあいだの関係性に対する互いの解釈を確認し合い、コミュニケーションの土台を築くための契機ともなっているのである。ハニ族をはじめとした雲南の山地諸民族の喫煙習慣としては、竹筒をくりぬいて作った水パイプによる「伝統的」な喫煙法がよく知られている。とはいえ、現在では山地村落部にも工場生産された紙巻きたばこが広く普及しており、ハニ族の村落においても社交の場で欠かせないものとなっている。ライターひとつで手軽に吸える紙巻きたばこの登場は贈与・交換の形式を根本的に変えるものであり、たばこそのものの社会的役割にも影響する趨勢であった。こうした状況に鑑み、本研究では2011年9月より現在まで継続している現地調査で得られた資料をもとに、ハニ族の村落生活における喫煙の諸相を、喫煙様式の転換に留意しつつ検討していく。

### 2. 研究方法

本研究を進めるうえでの方法は、ハニの村落における現地調査およびそこで得られるデータの分析を主とし、補足的に文献資料を利用した。まず文献の収集については、雲南省昆明市の雲南大学、蒙自市の紅河学院の図書館および紅河州政府図書館を中心として行い、一時帰国中には国立民族学博物館などでも収集を行った。山地諸民族の喫煙習慣に関連する資料はごく限られた数しか該当がなかったが、ハニ族文化に関連する先行研究、および口頭伝承や民話に関連する資料の収集は、中国語、日本語、英語およびハニ語を対象として多くの収穫が得られた。特に役立ったものとしては、1950年代に中国の少数民族地域で大々的に実施された一連の“社会歴史調査”報告書と、1960年代以降にタイで調査を行った若干名の欧米人類学者による著作と論文が挙げら

れる。また 1980 年代末以降現在までに中国語で書かれたおびただしい文献については、2000 年に日本の人類学者稲村務と紅河学院の楊六金（当時は紅河州民族研究所所属）によって作成された文献目録を参照しながら、主だったものを購入した。現地調査については、2011 年 9 月より 2014 年 4 月現在まで、雲南省南部のハニ族イ族自治州におけるフィールドワークを継続している。とりわけ省政府発行の長期調査許可を取得した 2013 年 4 月以降は、同州紅河県のハニ族村落における住み込み調査を続けており、本研究の事例は基本的にここで得られた観察記録に依拠している。ハニ族村落での調査使用言語はできるかぎりハニ語を用い、中国語雲南方言を補足的に用いている。

### 3. 結果

文献調査からは、雲南におけるたばこ産業の歴史や生産技術に関連する研究は少なくないものの、喫煙習慣については竹筒製水パイプの使用が山地少数民族の「伝統」として表象されるのみに終始していることが確認された。こうした状況を踏まえて、本研究ではまず、ハニ族村落における喫煙にまつわる記憶の語りの収集と参与観察にもとづき、この村での喫煙様式の歴史の変遷を、①キセルを用いて村落内で栽培されたたばこを吸う、②水パイプを用いて購入してきた刻みたばこを吸う、③紙巻きたばこを直接吸う（あるいは水パイプを用いて紙巻きたばこを吸う）、という三つが互いに重なり合いながらも数字の順序に沿って緩やかに主役の座を譲ってきたという展開を示した。「伝統」のイメージとはうらはらに、ハニ族の村落では、竹製水パイプの使用は「国民党の頃」すなわち 20 世紀初頭以降に定着した喫煙法であり、外部社会との交流が一般化したことにより導入されたものであった。さらにたばこの喫煙そのものについても、祖先祭祀においてたばこが供物とされないことを通じて、人々は「祖先の頃」には喫煙習慣そのものがなかったと認識している。

一方現在では、紙巻きたばこはハニ族の社交の場において欠かせない道具となっており、とりわけその贈与・交換の方法は、“ヨリ (yolil)”と総称される規範によってこと細かく決められている。ヨリとは「われわれのやり方」とでも言うべき概念であり、鍬の握り方や炉端の灰の処理の方法まで、村落生活における多岐にわたる行為は、ヨリにしたがうことによって共同体的アイデンティティと結び付けられているのである。本研究後半では、このヨリ概念を手掛かりとしつつ、命名儀礼と葬儀後の宴席についての事例分析を行った。ヨリに適うとされるたばこの贈与・交換の順序や経路は、基本的には既存の序列的人間関係に沿って解釈できるが、そこからの逸脱もまた観察される。そこでは、ヨリを守る／守らないという態度の転換が意識的に行われていたというよりも、ヨリそのものが既存の社会関係と対照させるだけでは捉えられない輻湊性を備えていることを示唆していると考えられる。本研究では、ハニ族の村落におけるたばこの贈与・交換は、近年著しく変化しつつある社会環境のなかで、「伝統」とは異なるかたちで共同体の維持に作用する実践を構成していることを具体的に示した。